

白金葎

5月号



平成30年5月発行

第87号

定例会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

六月十五日（金） 〃 兼題：夏の蝶 籜やな

七月二十日（金） 蓮見船（九時半小池ボート） 正午～三時第二

八月 休み

兼題句参考句 6月15日分

（夏の蝶、籜）

この道の果ては洋館夏の蝶

岸本由香

湖に出て夏蝶翅を荒使ふ

吉田未灰

鎌倉やことに大きな揚羽蝶

桂信子

新しき籜の打たれて鳴る山河

金箱戈止夫

上り籜組む青竹を流し来る

茨木和生

雪代の水受け流す上り籜

右城暮石

月例会報（18／5／18

9名欠3

母の日、松落葉

光成高志

母の日や母の襦袢を替へたけれ

松落葉六角堂へ下る道

武松の気象公園松落葉

国展に来る人お洒落若楓

葭切や二小節又二小節

佐藤宏之助

恙なく媪一番茶を摘めり

苔寺の苔に散り敷く松葉かな

会釈せる茶摘みの笠に指を添へ

母の日の母に購ふ車椅子

田水張るプラットホームの間際まで

松村幸一

真白玉いさかひても妻在りし日よ

吾を生みし若き力の母の日よ

母の日やお釜の底の焦げごはん

母の日や臍の緒からと箱に鳴り

母の日を偲べと雨や夜かけて

光 みち

母の日やいくたび問へど百といふ

掃かれあり野点の庭の松落葉

母の日やロボット歩きの母と居る

天保の魚拓一枚夏始

母の日や蛙の夜を熟睡す

吉羽多美子

郭公の呼び交はす里の夏祭

増田陽一

縁側に茶飲み友達松落葉

母の日や母の齢の倍生きて

豆腐手に緑の下の立ち話

豆の飯昭和の遠くなりにつけり

籠り居に立夏の朝の明けにつけり

仲本興正

山鳩の汝が妻亡しとうるさけれ

浅野正美

昨夜の雨地に貼り付いて松落葉

散松葉かがみたる子の足元に

母なくて母の日なくて日暮れけり

母の日の白となりたるいつよりぞ

飛び石を弾む少年夏来たる

武者昭七

湯冷まして新茶のうまみ香とともに

磯目健二

松落葉黒板扉の城下街

母の日なんかなかった頃の母なりき

アカシヤの雨の淋しさ昭和終はる

唐松の芽吹きが匂ふ五月晴

母の日や我が存命のもとなりき

まつご搔き山の匂ひを背に負ひて

遠足や母の弁当卵焼き

松葉散る山椒魚の谷深し

湖近く八雲旧居や松落葉

飯田孝三

風涼し人と土の凶銅版画

エッチング

父の稚の坐眠る母の日の車庫

こみシート

母の日の着るにはばかるプレゼント

母の日の遺影に一花紅い花

松落葉犬嗅ぐことも城の跡

田宮敦子

子供らが拾つて遊ぶ松落葉

地下鉄の車庫の入口松落葉

烏瓜船頭の顎長かりき

囀りや花嫁衣裳日に映える

母の日や影絵を作る指白し

一句鑑賞

母の日やいくたび問へど百といふ

誰からもよく幾つになられましたか？と聞かれる。その

度に百と云う。お母さん九十六いや九十七じやあないん

光成高志

みち

ですか。四捨五入すれば百でしょう。算数とは違いますよ。いいの私は百よ。この繰り返し。まわりは大笑い。俳句はこういうめでたさもある文学です。

母の日やお釜の底の焦げごはん

幸一

母の日に思い出すのはお釜で炊いたその底のおこげですという回想の句です。「身にしむや朝餉の竈火見てあれば」という句の懐かしさも胸に上がる。炊いたお釜の焦げご飯は香ばしいので子供たちが喜んで食べたものです。しゃもじで掻く音まで懐かしい。

松落葉黒潮遠く離りつつ

陽一

黒潮は、東シナ海を北上して日本列島の南岸に沿って流れ、房総半島沖を東に流れる暖流です。この黒潮が離れて太平洋に入ってゆくのを想像しつつ眼前の松落葉の道を歩いているのでしょうか。蝶紀行に島嶼を渡り歩いた陽一さんならではの大景を描写した佳句と思います。

松落葉黒板塀の城下街

昭七

秋田県角館の城下町の景色を描写されたものとか、私はこの城下町の切で大分の杵築、千葉県の佐倉、山口県の萩とか金沢とかの武家屋敷通りを思い浮かべました。黒板塀となると限定されるでしょうが、私はどうしてもお富さんの粋な黒塀見越しの松にとり歌詞が思い浮かびます。幸一さんと木更津を吟行したことも。

苔寺の苔に散り敷く松葉かな

宏之助

京都の西芳寺は苔寺と呼ばれる苔の美しい禅寺であり、最近世界文化遺産の一つに指定されたとか。私は二十歳の時桂離宮見学のあと訪ねた経験がありますが、松があったか記憶にありません。作者によると句会当日志賀直哉旧居に行った時一本の松があつて、散り敷いた松葉を見て、それを苔寺まで飛ばして作句されたとか、さすがに誓子ばりの作り様であります。

一句鑑賞

磯目健二

籠り居に立夏の朝の明けにけり

多美子

このところ暗い気分の籠居続きだったが、やっと、空輝き水輝く晴れやかな立夏の朝を迎えることができた。季節の明けと夜の明け、さらには鬱屈した思いからの解放と三重の明けを自分のものにできた。気分一新の予感に満ちた爽やかな句である。

松落葉犬嗅ぐことも城の跡

孝三

犬の嗅覚は人間の数万倍とか。人間には未知の異界も察知しているかも知れない。連れてきた犬が、松落葉の堆積する地面をしきりに嗅ぎ廻る。まるで埋もれた歴史の秘密を探るかのように。松林に囲まれた寂然たる廃城の趣きが一匹の動物の所作を点景にして印象的に目

に浮かぶ。

吾を生みし若き力の母の日よ

幸一

たらちねの母への賛歌。子を産むのも受胎するのも、さらにいえば性欲も生命力の発揮なのだ、老いた今は思われる。生命力旺盛な若き日に、よくぞ吾を生んでくれたと亡母に感謝を捧げる。

風吹けば葉裏に太る青い梅

正美

遅しく育った梅の実を目前に見るような印象鮮明な写生句。緑の葉が風に翻ると、存在感を増した青い実が黒い枝にびっしり生っているのが目に飛びこんでくる。風の強さまで実感させられる。

母の日やお釜の底の焦げごはん

幸一

電気炊飯器などの利器がなかった時代、つまり高度成長や都市化などの未だしの頃、飯は羽釜で薪を燃やして炊いた。火加減により飯の底面が焦げたりした。それが香ばしく独特の味で子どもは好んで食べた。ときには小腹が空いたとき母からおやつに貰ったりした。給食が実施される前は学校の弁当も含めて食事は一切母の仕事だった。昭和の子は母の手製の食べ物で育ったのである。

山鳩の汝が妻亡しとつるさけれ

陽一

山鳩（キジバト）は雌を求めて鳴く。繁殖期は年中である。群れる習性のドバトと違って単独かつがいで行動

するといわれる。求愛の鳴き声のほか愛の巢である縄張り確保の鳴き声もある。つがいでききる山鳩に、いわば空の巢を守るに似た独り身の自分を思わずにいられない。山鳩の鳴き声が煩わしいのではなく、亡き妻への追慕愛惜の情が誘われるのである。

一句鑑賞

増田陽一

母の日やいくたび問へど百といふ

みち

百歳も近くなつた母堂である。「お母さん幾つになつたの？」母の答は何時と同じ「百よ。」である。もうずつと前から答はいつも「百よ」であつた。聞く方は母の正確な年齢は承知の上であり、慶賀の気持で、また母が嬉しそうに答えてくれるのが楽しく幾度でも尋ねている。尤も、母上の時代は数え年が普通だつたこともある。ういまく言う「around 百歳」か。「いくたび問へど」がうまく、温かいユーモアのある好句と思う。

吾を生みし若き力の母の日よ

幸一

吾を産んでくれたのはうら若き母全身のちからであつたのだ、など歳とつて男が思うときその感慨は切ない。その母はとうに存命しない。「吾」は既に母の年齢を超えている。この「若き力」が絶対の措辞である。また「あが母の吾を生ましけむうらわかきかなしき力おもは

ざらめや」（歌集あらたま）という茂吉の絶唱をどうしても連想してしまふけれど、茂吉では作者特有の肉感まで行くところを掲句に於ては年中行事「母の日」に強勢の「よ」によつて聖化されている。

母の日や母の襦袢を替へたけれ

高志

襦袢を替へ替へて育ててくれた母が今は老齡不自由の身である。せめて自分の手でおむつを替へてあげたい、と、気持ちのよく判る句である。けれどふつうの年配男子が下手に手を出せることではない。介護の人は巧みに行くけれどあれは難しいので、実際に替へたとはい思えない。母を思う気持が高揚しているそれが「母の日」。

松葉散る山椒魚の谷深し

健二

この山椒魚は「半裂」とも言われる特別天然記念物の両生類オオサンショウウオであろう。ここでは松葉散るが季語で、「山椒魚の」はそれが棲むと言われる幽邃な溪の深さを伝え、その神秘的な谷底に向かつて松葉は散り止まぬのである。

松落葉犬嗅ぐことも城の跡

孝三

犬がよく嗅いでいるのは犬仲間の行跡であろうけれど、ここは城跡、嗅ぎ止まぬのは遠い城の歴史の、血と焔の染みついた残り香かも知れない。犬には人間の窺い知れぬ嗅覚の世界がある、と、「嗅ぐことも」と強調さ

れた措辞が想像を誘う句である。

「いいおほせて何かある」考

磯目健二

「しやぼん玉虹色割れて夢と消ゆ」は、四月句会の私の投句である。虹色の華麗が夢幻の如く消える儂さを言いとめたつもりだった。だが、句会では一点も得られなかった。句中に主宰がこの句を指して「すべて言い尽くして何かあるの句だ」と評した。それを聞いた瞬間、この句において私は俳句の要諦を逸していたことを悟った。言い尽くして表現が完了してしまっている。直線的で屈折が無い。そこには読み手が参入して詩想をさらに展開する余地が無く、作り手と読み手の共同幻想へ架橋して作品世界を広げる可能性が乏しいことは否めない。何という未熟！其角が句集に選んだ巴風の句「下臥しにかみ分けばや糸桜」を、去来が「いと桜の十分に咲きたる形容、よく言ひおほせたるに侍らずや」と褒めると、芭蕉は言下に「言ひおほせて何かある」と否定した。全てを表現し尽くしたために余情、余韻が喪失という欠陥に陥っていることを指摘したのだ。言い尽くしてしまつたら、あとに何が残るといふのかというのである。これを聞いて「ここにおいて肝に銘ずる事あり。初めて発句に

成るべき事と、成るまじき事を知れり。」と豁然大悟して、「去来抄」に記した去来もさすがである。

芭蕉は「句は七八分までの表現ではくどい。五六分の表現で至当なのだ」とも言っている。なにより端的で的確な表現と省略が産む余情。そこに俳句の要諦があると芭蕉は力説している。

最短の詩型である俳句は、詩語の表現力と連想喚起力の最高の發揮を生命としている。僅か十七音でミクロもカオスも含めて人間のコスモスからポエジーを拉し来たつて表現するという大業を成し遂げるには、詩語の厳選と徹底的省略が必須である。詩語の厳選とは言葉の暗示力を洞察して選び抜き、詩語の組み合わせ、つまり「取り合わせ」による相乗効果も視界に入れたものであるべきだし、同時に徹底的な省略とは、語らずに語る無言の表現の可能性を見定めて、言葉を削ることにほかならない。たとえば蕪村の句「愁いつつ丘にのぼれば花苳」。この句に心と自然のドラマを観取するとき、いかに錬磨の選択と省略が蕪村によって駆使されているかを見落としてはならないであろう。読み手はその選択と省略を念頭に置いて作品世界の構築を始めるのである。俳句が省略から生まれた余白によって表現する文学、あるいは余情の文学と言われるのは、この芭蕉以来の俳句特有の詩法

と作品の故である。俳句に限らず定型詩とは、本来言葉を
を選び抜きギリギリまで表現を絞って、そこにできる言
語的空間に詩情を見出すものに思われる。長く小説を
読み自作も試みてきた私のささやかな経験からいっても
その点、散文とは対蹠的と痛感する。小説でも表現の過
剰はタブーだが、自然主義文学の出発点をなすバルザッ
クやゾラでも明らかかなように、全体的表現への志向は散
文の否定できぬ属性である。社会と人間の徹底的追求と
全体像の表現は近代小説の主潮をなすものである。散文
特に小説では、芭蕉の「言ひおほせて何かある」の論理
は無縁のものか、あるいは無効といわなければならぬ。
私の内部に、すべて言い尽くしたいという表現欲があり、
それは主として散文の世界に関心を寄せてきたために自
然と身についたものである。作句でもそれが作品として
表出してしまったのが、冒頭のシャボン玉の句であり、
私が小説的俳句を作ってしまったがちな要因はそこにある
と自戒している。主宰の評言はその意味でも貴重なもので
であった。(隣の席の健二さんに呟いたのを聞き留められてこれ
だけの論文を書かれた。後半の論旨は健二流ですがそのまま載せま
した。編集子 追伸…「皆遵奉素難 而於僕何有」という嘉永末に
書かれた書簡の一部を原文で示す。これは鷗外の祖父が書いたも
の。読み下すと、皆『素問・難経』を遵奉するとも、僕において何

をか有らんや。口語訳は、たとえ、中国・日本のすべての医家が『素
問・難経』を信奉しようとも、私は信じません。これを私が言及す
るのは、江戸時代の知識人は皆漢文で書簡を書いていたということ
芭蕉の時代はこれより一世紀遡るが、去来が書いた、何か有る、は
右の文のように何有と同じ書き方の反語である。その意味は文脈か
ら読み取るのが常識なのだ。)

俳窓評論纂

* 5.6 の朝日俳壇 うたをよむ 考と妣 の題で 今井
聖が俳句に流行がある例として、右の考をちちと読ませ、
妣をははと読ませることに違和感があると書いている。
広辞苑で、前者はすでに亡くなった父のこと。妣は亡く
なった母のこと。古今の高名な俳人は使っていない。自
分の作品の中の父母が存命か泉下にあるかを文字で説
明することが詩にとっていかほど有効であろうか。郷愁
の中の父母も現実の父母も、父、母の表記で十分。作品
の中でいきいきと存在しているのだから。以上の論旨に
同感。その日の俳壇の選句のなんとつまらんことか。左
欄の歌壇の方に○が沢山ついた。「四月十三日啄木忌に思
ふこの時代閉塞感いつまで」(馬場あき子選)「真夜中の窓
の不思議な明るさに立てばばかりと春の満月」(佐々木幸
綱選)などである。

* 4.25の文芸時評 小説家 磯崎憲一郎の夢の論理も同感。すなわち、夢こそが小説の起源、小説の原型なのではないだろうか？ ロマンチックな連想や比喩として言っているのではない。夢と小説とはそれらが拠って立つ構造、論理を共有しているようにしか思えないのだ。小田山田浩子と高橋弘希の二つの小説を例に証明している。

(俳句は小説と大違い。夢の論理で書かれるものではない。自然描写の世界は現実である。)

* 以下の記事紹介は俳句文芸と関係ないかも知れないが、先年触れた三島由紀夫のことに触れてあるので一寸書いておく。今年の五十年前は一九六八年、パリで五月革命と呼ばれる学生反乱があった。日本では全共闘運動である。寄稿者の佐伯啓忠氏はこの年に大学に入学したとか。翌年の一月には東大安田講堂での攻防があり、三月には授業が再開された。大阪万博の前の年、アポロ宇宙船の月面着陸のあった年である。この「全共闘的なもの」の運動には参加しなかったが、共感するものがあつたと氏は述懐している。それは戦後日本が抱えた欺瞞や偽善に対する反発を根底にもっていたからだ。これらの欺瞞と戦うには合法的手段ではありえず、暴力闘争にしかありえない。浅間山荘事件や内ゲバへと至り全共闘運動は終焉する。その延長線にあつた三島由紀夫の自衛隊乱入、

割腹自殺事件が起こり衝撃を受けた。戦後の欺瞞を三島は攻撃し、一種の自爆テロを起こした。江藤淳は『ごっこ』の世界の終わったとき」と題する評論を書き、両方『ごっこ』だと論じた。革命ごっこ、軍隊ごっこ、どちらも現実には直面していない。氏の云いたいことはその後のだという事実。この欺瞞が利己心や金銭的貪欲さ、責任感の喪失、道義心の欠如といった戦後日本人の精神的退嬰を齎している、というのが三島の主張であつた。氏は五〇年前をさほど評価しないが、それでも今日の大学や学生文化にはないものがあつた。それは社会的な権威や商業主義からは距離をとり、既成のものをまずは疑い、自分の頭で考え、他人と議論をするというような風潮である。この異論は欺瞞を直視する気風こそ、という題がついている。

* 昨日健二さんから「芭蕉覚え書」白井吉見著の論文のコピーを頂いた。その一(『文学』S 21年12月号)その二(『文学』27年1月号)桑原武夫の第二芸術論の出て前であり、山本健吉の軽み論の出て前である。前者には「五月雨を降のこしてや光堂」の降のこしてやの解釈を岩田九郎、荻原井泉水、飯野哲一、志田義秀それぞれの説をあげて写生句ではないと例証されている。「幾100年の風

雨を凌いで、榮華の佛を残して居る光堂に対して、歴史的な詠嘆の情から発した句」とする頼原退蔵氏の説を最も簡潔精確な解釈であるとしている。加藤楸邨の解釈もこれに沿うものでこれで決定的となったと。この句と「夏草やつはものどもが夢の跡」と呼応して平泉の廢墟に立つた芭蕉の尋常ならぬ感動を結晶せしめていると結論づけられている。「田一枚植て立去る柳かな」も多賀城壺碑のむかしよりよみ置る云々の文も、後の「塚も動け我泣声は秋の風」にしても「むざんやな甲の下のきりぐ」にしても「荒海や佐渡によこたふ天河」にしても佐渡の歴史的回顧への愁思が単なる客観的写生を越えて発想されているのだ。俳諧は客観をそのまま提出して客観をして自ら語らしめることを主眼とする。これは俳句形式の制約によるのだけれども、俳人の観想的非人情的な洒脱な生活態度がその要件である。奥の細道の芭蕉の句は、むしろ主情的な感情の表白にきわめて特質的な性格が見えるとしている。西鶴の「大矢数」の連句の取り上げたものは町人社会の現実の諸々相そのものである。事実を事実としてそのまま投げ出している。芭蕉のは町人的現実を取り上げて、古典との関連に於いてつねにそれを情趣化している。西鶴は事実そのもの。芭蕉は情趣である。一方は人間生活そのものが問題になっており、一方は言

葉の問題である。ここが芭蕉と西鶴の分かれ目である。俳句形式を捨てなかったのとその間隙を埋めるべく散文形式に行つた西鶴との分かれ目である。(つづく)

*澄雄俳話百題を時々読んでゐる。初学のころはそれほど思わなかつたが最近は云わんとしていることがよくわかるようになった。また同感同感と思う。例えば、鎌倉のS 57年・5の杉の句会でしゃべられたことを要約するとこうである。最近杉の選句をしていて思う事は風景句がなくてみんな人事句だということ、解釈や理屈が付いた句が多い。ごく初心の人は、(元日や祝ひの煮豆ふくらと)という句をつくる。当たり前のことではもう俳句にはならない。原因結果が全部わかつたような世間の常識みたいなところで句をつくつてはいけない。それからもう一つ警戒しなければいけないのは、俳句に習熟してくると、今度は俳句の高級な常識を使いだすということ。いつも、じかな物からの感動をうけてのその感動を手応えにして句をつくつていくのはいいんですが、俳句に慣れてくると、そうではなくて俳句のうまい言い回しをして俳句だけができる。そういう句がある。これも警戒しなければならぬ。俳句をつくつていくという手触りをどこかにもつてほしい。物からのじかな感動を忘れてしまつて俳句を作つてもどうにもならないんです。達者の

病なんだなあ。芭蕉さんが云っている、俳諧は三尺の童にさせよとね。現代の俳句と云うものは、意味があり過ぎると僕は考えています。ことに人間探求派以降、俳句が意味を持ち過ぎた。俳句はもつと広い世界のものだという気がします。そういう大きな世界が俳句に詠めるわけだから、その世界をひとつもつてほしい。それには自分を鍛えなければ、同時に俳句を鍛えなければそこまでいかないだろうと思います。たとえば「下駄さげて畦を子が来る揚雲雀」という句、よく出来ています。しかし、「来る」がいいか「行く」がいいのか、いつ「ペン」考えてほしい。前者は世界がせばまつてきはほしいか。後者の「子が行く」といったら、そのままの状況がほつと出されて案外大きな雰囲気をもつんじゃないか。今の杉の一番悪い所は情緒を持ちすぎることです。何と云うか、蹴とばす力がなくて情緒で抱き込んでるんです。だから「来る」になってしまふ。「行く」にとつてもならない。そういうところにもつとけじめを自分でつけければ、俳句はもつと広い世界にでられるかもしれない。俳句は夏炉冬扇の世界だ、あるいは虚にゐて実を行うべしと芭蕉はいっている。道元さんは仏教自体のことを言っているんでしようが、「公界の調度」ということを言っている。実利の世界に生きるかどうかは別にして、僕は俳句も又

大きな意味で「公界の調度」だと思っている。人間探求派というものは、俺は悲しい、俺は苦しいということばかりを句にしてきた。現代の俳句も人間の心理的な面とか、一種の解釈のつくようなところで俳句を作っている。非常に知的になっている。三十、四十の時代はそれでもいいでしょう。しかし僕はもう六十を越したから、その世界はたくさんだ、もうわかりましたーもつとやらからかに公界の調度だと思いたい云々。この年、氏は六十三歳である。人間探求派とは師事した加藤楸邨のことをさしている。公界の調度とは禅宗の言葉で第二十看經に出て来る言葉。私には説明できない。世の中のものをそのまま受け入れる、そういう意味の言葉らしい。

受贈誌（平成30年五月号）

雪解どき朝より潤む爺ヶ岳（彩14号）

平野ひろし

里山にむつくりもつこり椎若葉（一）

〃

天上の花野の花で遊ばれよ（悼木村貞恵さん）

〃

庭畑豌豆の莢はち切れん（一）

滝野和子

薔薇の園美しき真紅はパークマン（一）

五味ケイ子

お帰りと開く農小屋初つばめ（一）

山梨節子

寒星を見上ぐ太極拳終えて（一）

村瀬米子

濡色の春の大鷗こうべ振る（一）

平野彩和

東京クラブ(五月号)

筑波嶺や軒深くしてつばくらめ

春疾風魔女の手となり迫り来し

風光る大道芸の技決まる

立浪草蹠音のせぬ靴通る

留守番の猫に遅日や十時間

芭蕉のかるみ以後 (45)

光成高志

武子

栄

璃子

〃

天和期の革新運動のさなかにあつた延宝九年春、門人

李下から芭蕉一株を贈られ、草庵に植えた。「はせを植ゑ

てまづにくむ萩の二葉哉」(続深川集)。ここまで書いて来

て、そんなに急いでは乱暴であると気づかした本に出

合った。本マルシェで買った栗田勇著の『芭蕉』という

大部な評論書である。実はこの作者の本を私は昔買つて

いた。以前芭蕉の鹿島詣を読んで、禅の事を齧らな

ければ是は判らないと気づいて、佐藤圓著の芭蕉の文学

(昭和46年)は読んでいたので、これを補強する意味で、

栗田勇著の「道元いまを生きる極意」(二〇〇二)を読ん

だのであった。氏は仏文科を出られた方だが一遍上人で

受賞され、大和の古寺巡礼や道元、良寛、千利休、最澄、

西行など創作評論活動を精力的にされておられる。右の

『芭蕉』の冒頭に何故芭蕉に行きついたらか心の変遷を赤

裸々に書かれている。私は小林秀雄に連なる方と思い、

嬉々として今読書中である。これをここに紹介していく

と私の寿命が尽きると思われるので、急ぎ急ぎ感得した

ものを私流に書いていく。芭蕉が亡くなる元禄七年の夏

から秋にかけての一句一句が心に染みてくるが、その感

情を抑えて普遍的になるように書こうと思う。

清滝や波に散り込む青松葉

笈日記

秋深き隣は何をする人ぞ

〃

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

〃

これらの句の心境がわかるようになりたいためである。

誓子先生の「一輪の花となりたる揚花火」も清滝の句の

心持ちに近いと思うがどうかであろうか。そういう感想は

さておき、野ざらし紀行の旅にはやく近づきたい。しか

しながら今読書中なので、この項は閑話休題にしなけれ

ばならない。芭蕉を己の俳号とした所以も書かねばなら

ないし、芭蕉と禅との係りにも触れなければならない。

手っ取り速くは、以前投稿した鹿島詣に手を入れて時間

稼ぎをすることもできる。ここでは芭蕉が芭蕉と称した

その所以を書くことから始める。

芭蕉という植物には仏教的比喩が古くからあることを

桃青は知っていて、李下から贈られた芭蕉が屋根をも越

える大木になったのに乗じて芭蕉の仏教的比喩を念頭に

自らも芭蕉のようにならねばと思いつけた号である。これは私の独断である。というのは栗田氏が氏の学兄である石田尚豊（ひたのよしのぶ）博士に教えられたことを書かれてある。

芭蕉が書かれてあるもつとも古い経典は『五陰譬喩経（おんひんぎょう）』（後漢安世高訳）があるところで、「譬えてみれば、

比丘が良材を求めて、斧を担いで林に入り、曲らない真直ぐな芭蕉を見て、その本と末とを斬り、葉を剥いでゆくと、結局中心がなく、牢固としたものはない。

結局芭蕉は強そうに見えても少しも強くない「人間の行為も芭蕉の如く果無（はなしな）いものである」とし、「色受想行識の五蘊（ごん）は堅くなく、実なく、空であるゆえ執着するものはない」と説く。般若心経に無色無受想

行識という経文があるが、その色受想行識である。つまり、形、感覺、知覚、表象、認識の五蘊を言う。蘊（おん）とはサンスクリット語で集まりを表す。芭蕉の樹に仏教の

「色即是空」の現世化を託したのである。つまり私は芭蕉のように空を俳諧において現実化するぞという宣言ではなからうか。色即是空、空即是色と言う意味は、形があるものは現象として見えるが、現象というものは時々刻々変化するものであって、変化しない実体というものはない。実体がないからこそ形を作れるのだと、いうのだ。真に禅宗の逆説的発想が必要になる。滑稽や諧謔に

よる笑いのうちに、空をあげき、その空つまり虚空が真となる。宏之助さんの先月の句の真如である。

お便り広場（到着順、敬称略）

前略 27日付けのメール有難く拝受しました。思えばUSBの扱い方から始めて今日まで実にこまごまと且丁寧に指導頂き感謝のほかありません。それでもまだ不器用のせいも自分でもあきれられる程飲み込みが悪いようです。機械いじりは自分の性に合わないようのでいささか疲れています。無理は禁物と心得てお身体お互に大事にしましょう。御礼まで PC嫌いより。 (430 昭七)

(どうてことないです。家電製品と同じで慣れれば誰でも出来ます。米国の青年が考えた一枚の画面でうまくやれるように窓を沢山作ってありますので、そこを開けなければ見えないだけです。昔のテレビなど叩いたらついたりしていましたが、パソコンは衝撃に弱いので叩かないで下さい。鑑賞文は受信しましたので、それと同じことをすれば、賢治も送信できます。お会いした時に。)

高志さまへ 雨後晴の憲法記念日道路渋滞の様子です。子が連れ帰省すこいですね。私はと云えば、午前中土を踏んだのは庭へ出ただけで、白金葎の写真を眺め丈夫そうにすくく伸びているようで毎号、同じ白金葎でも飽きず見られるというよい表紙だと思っております。四月

の会報は休会のため発行はありませんでした。三月二十日に山尾氏が浜松町の貿易センタービル前で転倒左足骨折病院へ搬送手術、四月二十六日にリハビリ病院へ転院、只今リハビリ中です。(中略)五月は山尾氏不在でも句会はいたしますので会報は送らせて頂きます。

みち様へ 豌豆昨日二日三時すぎに頂き晩ごはん計画を変更、仰せのとおり、豆の香ほつこりの豆ごはんを炊きました。お送り下さらなければ豆ごはんも作らなかつたでしょう。土筆と云い豌豆と云い、旬のものありがとうございます。サヤの中の豆は多いもので八粒も入っていました。丁度々の量で剥くのも楽しみつゝ、白米にお酒少々昆布を入れた水に浸し塩味にチョットお醤油を垂らし、おそろく開けた炊飯器、我ながら上出来でした。ありがとうございます。新宿御苑のことも高志様の七句で行かずともその時期での様子を知り得ました。

(5.3 璃子)

白金霞四月号拝見。小生も進化しなければと思い一年前からメールを始めました。アドレスは(中略)です。空メールを下さればと思っています。先々週三朝温泉に湯治行つて初河鹿を聞きました。

暁闇の闇震はせて初河鹿 燕来る美作美し国として

ご自愛の上ご健吟下さい。春の富士山の写真に春雪は天

女のはだへ富士高嶺の句あり。

(5.4 ひろし)

初夏の候益々ご健吟のこととお慶び申し上げます。「白金霞」四月号をお送りいただきありがとうございます。小生3/20に浜松町の貿易センタービル玄関階段を踏み外し、大腿骨を骨折。救急車にて入院手術。リハビリを含め七月までには退院できる予定です。それまでは「あすか」と「ブログ」の送付をお休みさせていただきます。お許し下さい。気候不順の折、健康にご留意ください。高志様みち様

(5.5 ひろし)

(どうかゆるりと御静養下さい。整形外科は時間が治癒してくれま

す。おうちの方へ白金霞はお送りします。) 五月に入り野も山も新緑のさわやかな季節になりません。本日白金霞四月号受け取りました。あまり無理をしないように思いついたら最後までやり通す性格も私も含めて少し心にゆとりを持って暮らすことですね。拓也晶子やさしい心を持った子供で良かったね。私は八七歳になりました。あまり歳のこと考えずマイペースでやっています。野菜作りの雑草に往生しているところです。敏子さんによろしく。一人住み明日の計画メモに書き

(5.10 健一)

お父さんお母さん いつも野菜など送っていたきありがとうございます。暑くなってきたので、お体に気を

つけてくださいね。お菓子少しですが良かったら召しあがって下さい。水きんつばはよく冷してから (513 恭子
 日々青葉若葉眩ゆくご健吟のことゝ存じます。五月例会
 会楽しみにしていましたが、定期健診の日取りが急に変わ
 り重なるってしまい、出席できなくなりました。別添の
 とおり出句いたしますので、お手数ですが、何卒よろしく
 お願い申し上げます。ご自愛とご健吟の程をお祈りいた
 します。

(516 孝一)

白金霞のみなさまへ この所お休みつづきで申し訳あり
 りませんでした。誠に勝手ですが去年秋ころより前から
 入っていた句会が忙しくなりました。その上力不足、体
 力不足を感じて結社はひとつと思ひ至りました。長い
 間皆様には俳句のご指導はじめ人生の来し方又生き方
 をお教えたゞきほんとうに有りがとうございました。
 心から御礼を申し上げます。これからも御誌のますます
 のご発展をお祈り致します。

(517 紀子)

変に暑い日々の中に変な事件や国のトップの方々の信
 用ならないモロく北朝鮮、アメリカ、韓国、みーな？変
 です。イスラエル、パレスチナ、皇室の問題など枚挙
 にいとまなし。生きすぎた私でも、いろいろの結末を見たい
 が為にもう少し生きてもいいかしらなどと考えていま
 す。つくしんぼ豌豆など季節々々のお品充分に楽しませ

て頂きました。御礼申し上げます。五月の東京クラブは
 喪中の方、リハビリ中の方の欠席で五名の句会でした。
 少なくともそれぐ持ち味の違うのはいつも面白く、句会
 はやはり大切と思います。うまくても下手でも自分の句、
 あまりひねくるよりマシかなと云う心境です。若い頃と
 変わってきました。高志先生のお身体いかにでいらつしや
 いますか。少し異常な日々お大切に。支えていらつしや
 るみち様もくれぐもご自愛を。ごふだん用お茶を少々同
 封いたします。京は香り静岡は渋く狭山は甘いとか。ご
 きげんよう。光 みち様
 (先生と書かないで下さい。私も璃子さんの手紙を読むのが楽しい
 です。句会は少なくともそれなりにこれも楽しい。先の御苑での句
 会は3人でしたが、吟行は自然に直に触れるので、自分と自然の関
 係を感じて楽しく思えるのですね。今は私も右の璃子さんの心境と
 同じです。故森澄雄がそういうことを俳話で残しています。高志)

(518 璃子)

我孫子日記

	4/26	例会
	5/2	SOA
	5/4	所→戸
*	中川	番館→江
	資料	館深川
	5/6	資料館
*2		国展
	5/9	
	SOA→	神
*3	保町→	朝
	日新聞	社
	5/16	
	SOA	
	5/18	例会

*晩春の青空晴れて雲湧ける

高志

のらくろ館の記事初夏の資料館

時計台の他なものなし昔宿

みち

都宮バス国旗を交差みどりの日

〃

*2 知足の掲示新樹の天祖神社

高志

*3 ビル街の社の御前楠若葉

〃

比内鶏の親子丼うまし町薄暑

〃

編集後記

電子化されて入稿されると句会の日から三日でここに来ます。これが編集子にはリズムが出来てよろしいのです。これからの入力には俳句と便りのみにします。先月号でも書きました。

心臓の冠動脈の梗塞は心筋梗塞と云って放置したらばすぐに死んでしまうようですが、現代はその兆候があった時点で病院に行けば動脈に細い管を入れて造影剤でレントゲン撮影をすれば見えるので、即処置に入れます。

私はそれで助かりました。この処置法が確立されて、ハートマークの病院が大はやりのようです。処置後はフットアッパーカテーテルとか言ってます、その後の様子も検査してくれそうです。その時言われたのですが、よく歩いたりして運動するほうがいらしく、よく運動して下さいよと私も云われました。それに励まされて今年から、水泳

の他に太極拳、ヨガを始めました。腰の大手術をした後遺症もあるので、立身中正というその極意ができず、ふらふらするのですが、見様見真似でやっています。ヨガは瞑想の一つ、瞑想は座禅とほぼ同じ、禅の修行の要とか、芭蕉も歩きながらの瞑想をやったのではないかと思えます。現代は頭脳を使いすぎるくらいがあるので休めるのにいいらしい。

白金霞5月号(通巻第八七号)平成三十年五月二十一日発行

編集・発行人 光成高志 発行所 二七〇・一二二九 我孫子市南新木二四一七

☎・fax 〇四七二一八七一一〇六八

表紙の題字：加納綾女 同写真は平成三十年五月二十一日の白金霞

(銭袋、パンパステラスの前に咲く)